

# 女子高校生における親の期待と学力

## － 3年間の縦断研究 －

相良 順子\*<sup>1</sup> 宮本 友弘\*<sup>2</sup> 鈴木 悦子\*<sup>3</sup> 川並 芳純\*<sup>4</sup>

### Three-year longitudinal study of academic attainment in female high school students and parents' expectations

SAGARA, Junko, MIYAMOTO, Tomohiro, SUZUKI, Etsuko and KAWANAMI, Yoshizumi

#### 要旨

私立の女子高校生を対象にして、高1、高2、高3の3時点での本人の報告による親の期待と学力偏差値との関連を検討した。親の期待として、有名大学への進学への期待を取り上げた。その結果、国語、数学、英語に共通する点として、1年次の学力が高いほど親の期待を高めるという関係を見出した。科目によって異なる点としては、国語では、1年次の学力が2年次の親の期待を高め、さらに、その親の期待が3年次の学力を高めるという学年を超えた相互作用の関係を見出した。数学においては、子どもの学力と親の期待との関連は、1年次以外は見出されなかった。英語では、1年次の学力が2年次の親の期待を高めるという関係が見出されたが、その期待が3年次の学力に影響するという関係は見出されなかった。教科における親の期待の作用の違いとその理由が考察された。

#### キーワード

女子高校生, 親の期待, 学力, 縦断研究

#### Abstract

Correlations between parental expectations and academic attainment of female, private high school students were examined, based on students' self-reports at three time points: first-, second-, and third-graders. Parental expectations were assessed by focusing on expectations regarding daughters' acceptance into high-ranking universities. Results indicated that daughters' academic performance of Japanese, mathematics, and English in the first-grade increased parental expectations in the first-grade. Moreover, academic performance of Japanese in the first-grade increased parents' expectations in the second grade, and these expectations increased academic attainment in the third-grade. Furthermore, academic performance of English in the first-grade increased parents' expectations in the second grade. However, the expectations did not affect academic attainment in the third grades. Reasons of the difference of the influence of parents' expectations on their daughters' academic attainment among 3 subjects were discussed.

#### Key words

Female high school student, Parents' expectations, Academic attainment, Longitudinal study

子どもの発達にとって、親の存在は大きい。幼児期から青年期を通じて、親の期待や願いが子どもの学業成績や職業選択、パーソナリティ、学校での適応などに対して影響をもつことは、多くの研究で見いだされている(春日・宇都宮・サトウ, 2014)。

特に、わが国では、親の期待と子どもの心理的適応との関係に多くの関心が集まっており、たとえば、河村(2003)は親の期待と子どもの完全主義との関係、渡辺・新井・濱口(2012)は子どもの自己価値やストレス反応との関連、春日他(2014)は、行動特性や生活満足感との関連を検討している。

一方、親の期待と学力や学業成績との関連についての研究は、国内では非常に少なく、主に国外で行われている。Englund,

Luckner, Whaley, & Egeland (2004) は、小学生を対象に、親の期待と子どもの学力との関係を検討している。その結果、親の期待から子どもへの直接の影響は見られなかった。しかし、Benner & Mistry (2007) は、9歳から16歳までの貧困家庭の子どもとその親に対し、親の子どもの進学への期待は弱いながらも学業成績に影響することを明らかにした。また、Zhang, Haddad, Torres, & Chen (2011) も、日本では中学2年に当たる8学年時の親の期待が、3年後の子どもの学業成績に弱いながらも影響していることを示している。これらの研究は、対象の子どもの年齢の違いはあるにしても、親の期待がかならずしも子どもの学業に対し明確な影響を持つとは結論づけられないといえる。

\* 1: 聖徳大学児童学部児童学科・教授 / \* 2: 東北大学高度教養教育・学生支援機構・准教授

\* 3: 聖徳大学保健センター・教授 / \* 4: 聖徳大学児童学部児童学科・教授

親の期待の子どもの学業成績への影響を検討するとき、親の期待が子どもに影響するのか、それとも、子どもの成績が親の期待を高めるのか、という問題がある。この点を明らかにするには、縦断研究によって検討する必要がある。Englund et al., (2004) や Zhang et al., (2011) は縦断研究であるが、日本では親の期待に関する縦断研究は見当たらない。

そこで本研究では、その多くが大学進学を目指す私立高校の生徒の3年間の縦断データを使用し、親の期待と学力の関連を検討する。高校生は、3年間の間に、将来の職業に関連した大学を決めることになる。中学と違い、将来の具体的な職業のイメージを持つ時期であり、職業選択においてもその学業成績は重要な決定要因となる。この高校生の学業に、親の期待がどのように影響しているか、あるいは、子どもの成績が親の期待にどう影響するのかを検討したい。

ところで、親の期待といっても、その測定の仕方は研究によって様々である。まず、親の期待は、親自身が持っている期待なのか、それとも子どもが認知する期待なのかという問題がある。これは、研究のねらいが、親をはじめとする社会的環境要因に注目するか、あるいは、子どもの自身のやる気や学力向上に注目するかによって異なる。前者は親自身の回答による期待であり、後者の場合は、子どもの認知をとりあげることになる。本研究では、子どもの学業成績の伸びに影響を与える要因として親の期待をとらえ、子どもの認知する親の期待を扱うことにする。

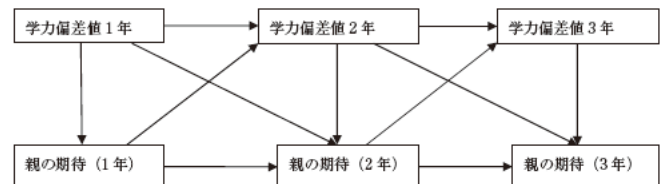
次に、親の期待をどうとらえるかという問題がある。たとえば、庄司・藤田(2000)は、大学生を対象に、中学生のころの親の養育態度と親の期待の関連を検討しており、その中で、子どもが認知している親の期待を領域別に分類している。期待領域としては、人間的成長、社会・経済的地位達成、良い子、結婚・家庭生活、進学・学歴などをとりあげている。本研究でも、この領域を参考にして、学力との関連をとりあげる。

加えて、本研究では、学力を教科別に検討した。高校生では、1年生や2年生で文系、理系、あるいはめざす大学によって履修する科目を選ぶ場合が多い。したがって、教科によって親の期待との関係も異なることが推測される。本研究では、国語、数学、英語という3教科別に親の期待と学力との関連を検討する。

本研究の目的は、本研究では、高校の1年、2年、3年の学力と親の期待を縦断的にとらえ、子どもの認知する親の期待は、学力に影響するのか、あるいは、学力が親の期待に影響するのか、またさらに、それは学年を超えて影響を及ぼすのか、という点を明らかにすることである。具体的な関連モデルを図にしたものがFigure1である。まず、学力は、各学年間で高い相関が予想される。同様に、子どもの認知する親の期待も学年間で高いだろう。その上で、入学して間もない1年次の学力が親の期待

を高めると考えられる。さらに、その親の期待は同年と次年の学力にも影響すると予想される。また、同時に1年次の学力は同年および次年の親の期待に影響することが予想される。

Figure 1 親の期待と学力の関連モデル図



## 方法

**調査対象者** 首都圏にある私立のA女子中高一貫校の生徒を対象にした。201X年に入学した高校1年生の3年間のデータが揃っている173名であった。分析では記入漏れにより有効データの数に変動があった。

**調査時期** 毎年、2月に実施された。

**手続き** 質問紙調査法。調査票は担任を通じて配布、回収された。学力は、協力校で毎年実施される標準学力テストの結果を使用した。

**調査内容** 質問紙は賞賛獲得欲求・拒否回避欲求と親の期待から構成された。本研究では、親の期待のみを取り上げた。

**親の期待** 庄司・藤田(2000)や遠山(2006)の親の期待尺度の項目を参考に、高校生への期待としてふさわしい項目を10項目作成した。「期待していない(1点)」「どちらかといえば期待していない(2点)」「どちらともいえない(3点)」「どちらかといえば期待している(4点)」「期待している(5点)」の5件法により、母親と父親それぞれに対して評定を求めた。

**学力の測定** 標準学力テスト(ベネッセのスタディサポートの調査実施の年度版が7月に実施された。)の国語、数学、英語の全国を基準にした偏差値。

## 倫理的配慮

本研究は聖徳大学ヒューマンスタディに関する倫理審査委員会の審査を受け認められた。

## 結果

### 3年間の学力の推移

1年生、2年生、3年生の3時点での国語、数学、英語の学力平均値の推移を示したものがTable1である。

対応のある1要因分散分析を行った結果、数学と英語で学年差がみられ、LSD法による多重比較の結果、数学の1年生から2年生、英語の2年生から3年生の間で平均値の差が有意に( $p < .05$ )上昇した。

**Table1 教科別学力の記述統計と分散分析の結果 (SD)**

	N	1年	2年	3年	F値
国語	160	48.70 (10.73)	48.97 (11.34)	47.59 (10.06)	3.02
数学	152	44.83 (10.99)	48.95 (10.18)	48.30 (10.15)	23.13***
英語	160	48.08 (11.09)	49.79 (10.61)	51.81 (11.56)	51.79***

\*\*\* $p<.01$

**親の期待尺度の検討と「進学期待」の3年間の推移**

作成した項目群について、1年生のデータを対象に、探索的に因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行った。その結果、母親は3因子、父親では2因子が抽出された。その結果をTable2-1, Table2-2に示す。母親の場合は、第1因子が有名な学校に進学したり合格したりすることへの期待であることから、「進学期待」( $\alpha = .88$ )、第2因子はまじめな生徒であることや友達と仲良くなど生活面での期待であるため、「生活期待」( $\alpha = .76$ )、第3因子は、将来の経済的な安定への期待のため、「経済的安定」( $\alpha = .74$ )と命名した。父親は、第2因子に母親と同様の有名校進学期待と同様の項目が「進学期待」( $\alpha = .91$ )としてまとめ、第1因子は、それ以外の期待であったため、

**Table2-1 母親の期待の因子分析結果**

項目	進学	生活	経済的
	期待	期待	安定
有名な学校に進学すること	.891	-.039	.018
難しい学校に合格すること	.838	.004	.041
真面目な生徒であること	.133	.689	-.212
将来仕事で成功すること	.025	.632	.141
テストで良い成績をすること	.240	.625	-.070
友達と仲良くすること	-.185	.539	.141
将来幸せな家庭を築くこと	-.241	.502	.287
将来お金の心配のない生活をおくること	-.012	-.037	.819
将来安定した収入のある仕事につくこと	.114	-.020	.630
将来裕福な生活をおくること	.344	.090	.433
因子相関行列	進学	生活	経済的
	期待	期待	期待
	生活期待	.366	
	経済期待	.339	.637

**Table2-2 父親の期待の因子分析結果**

項目	生活	進学
	期待	期待
将来幸せな家庭を築くこと	.825	-.207
将来お金の心配のない生活をおくること	.784	.016
友達と仲良くすること	.741	-.220
将来安定した収入のある仕事につくこと	.705	.064
将来仕事で成功すること	.631	.255
将来裕福な生活をおくること	.502	.270
真面目な生徒であること	.418	.192
有名な学校に進学すること	-.105	.966
難しい学校に合格すること	-.121	.930
テストで良い成績をすること	.421	.431
因子相関行列	幸福期待	
	進学期待	.476

「生活期待」( $\alpha = .86$ )と命名した。各因子に属する項目の単純合計値を下位尺度得点とし、3年間の学力との相関を算出した。その結果、母親と父親の「進学期待」のみが学力との有意な相関がみられた(母親 $r = .163, p < .05 \sim r = .336, p < .001$ ) 父親 $r = .180, p < .05 \sim r = .353, p < .001$ )。また、母親と父親の「進学期待」得点には高い相関( $r = .668, p < .001$ )が得られたため、以下の分析は、母親の「進学期待」得点を親の期待として取り上げた。「進学期待」の3年間の平均得点とSDをTable3に示した。対応のある1要因分散分析の結果、有意( $F(1,119) = 146.5, p < .001$ )であり、LSD法による多重比較の結果、すべての学年の組み合わせで有意差がみられ、2年生、3年生、1年生の順に親の期待が高かった。

**Table3 親の期待の記述統計**

	平均値	SD
1年次の親の期待	2.92	1.11
2年次の親の期待	5.79	2.32
3年次の親の期待	5.25	2.47

**変数間の関連モデルの検討**

本研究は、1年生、2年生、3年生時点での学力と親の期待との関連を扱った縦断研究である。各変数間の相関はTable4に示した。相関表で示されたように、3教科共通して、各学年間での学力は $r = .71$ 以上の高い相関を示し、親の期待も学年間で中程度の相関が得られた。親の期待と学力との関連では、3年次の親の期待と数学との相関以外はすべて有意な相関が得られた。

次に、親の期待としての「進学期待」と学力との関連についてFigure1に示した関連モデルを検討した。分析は、欠損値のない112名に対して構造方程式モデルによるパス解析を行った。以下、教科別に分析の結果(Figure2-1~2-3)を示す。研究の目的から、結果の図は、5%水準で有意なパスのみを表した。国語、数学、英語の3教科を通じて、学力は、各学年の間に高い関連がみられた。また、親の「進学期待」も、学力ほどではないが、学年間で中程度の関連がみられた。なお、適合指標は望ましい値に達していないものの、高校3年間を通して親の期待と学力の関連性を見出すことを優先して許容した。

国語の場合、1年次の学力から1年次の親の期待、2年次の親の期待へのパスが5%水準で有意で、また、1年次の親の期待から2年次の学力へ有意なパスが得られた。さらに、2年次の親の期待から、3年次の学力への弱い5%水準で有意なパスが得られた。1年次の国語の学力が2年次の親の期待を通じて3年次への学力に影響を及ぼすことが示された。

数学の場合、1年次の学力から1年次の親の期待へのパスが5%水準で有意であったが、親の期待から次年度の学力への有意なパスは得られなかった。また、1年次の学力から2年次の

Table4 各変数間の相関

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪
①国語 (1年)											
②数学 (1年)	.577***										
③英語 (1年)	.620***	.685***									
④国語 (2年)	.711***	.715***	.705***								
⑤数学 (2年)	.484***	.755***	.579***	.597***							
⑥英語 (2年)	.639***	.718***	.871***	.690***	.629***						
⑦国語 (3年)	.673***	.570***	.641***	.752***	.544***	.668***					
⑧数学 (3年)	.359***	.646***	.466***	.475***	.791***	.540***	.419***				
⑨英語 (3年)	.664***	.703***	.827***	.726***	.647***	.842***	.719***	.541***			
⑩親の期待 (1年)	.163*	.304***	.299***	.244**	.262**	.336***	.314***	.205*	.309***		
⑪親の期待 (2年)	.335***	.293***	.366***	.329***	.257**	.359***	.376***	.201*	.362***	.506***	
⑫親の期待 (3年)	.301***	.343***	.316***	.285**	.234**	.257**	.285**	.163	.321***	.481***	.519***

\*\*\*  $p < .001$  \*\*  $p < .01$  \*  $p < .05$

親の期待への関連もなかった。

英語の場合、1年次の学力から親の期待へのパスは5%水準で有意であり、また、数学と違い、1年次の学力から2年次の親の期待へも有意なパスが得られた。しかし、親の期待から次年度の学力への有意なパスは得られなかった。

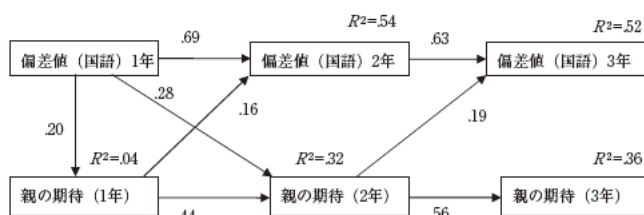


Figure2-1 パス解析の結果 (国語)

注) 表中の数値は5%水準で有意なパスのみの標準化係数を示す。  
 $X^2(4) = 31.91^{***}$  CFI = .91 RMSEA = .25

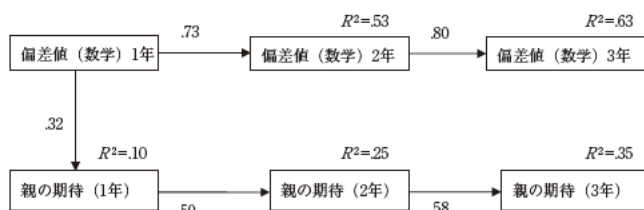


Figure2-2 パス解析の結果 (数学)

注) 表中の数値は5%水準で有意なパスのみの標準化係数を示す。  
 $X^2(4) = 28.78^{***}$  CFI = .92 RMSEA = .24

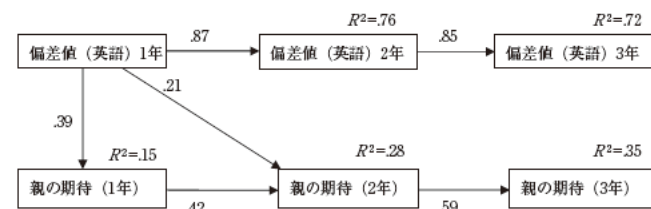


Figure2-3 パス解析の結果 (英語)

注) 表中の数値は5%水準で有意なパスのみの標準化係数を示す。  
 $X^2(4) = 32.64^{***}$  CFI = .93 RMSEA = .25

### 考 察

本研究の目的は、女子高校の1年生から3年生までの国語、数学、英語の学力と親の期待との関連を検討することであった。親の期待尺度を作成したが、親の期待領域としては、難しい学校への進学を期待する「進学期待」のみが、学力と関連があったために、本研究では、親の期待として「進学期待」のみを取り上げた。子どもからみると、父母からの進学への期待は明確に認識されやすく、また、学力と関連づけられることが示された。

次に、親の期待と子どもの学力の3年間の関連モデルを検討したところ、国語、数学、英語に共通して1年次の学力が、同学年の親の期待へ正の影響を及ぼしていた。つまり、どの科目においても1年次の学力が高いほど親の期待を高める方向で影響することが示された。また、国語については、1年次の親の期待は、2年次の学力にも正の影響を及ぼし、2年次の親の期待は、3年次の学力にも影響するという関係が示され、1年次の国語の成績が良いほど親の進学期待が高まり、最終学年である3年次の学力まで影響を及ぼすという学年を超えた関係が見出された。

一方、数学では、1年次の学力は、同学年での親の期待に正の影響をもつが、親の期待は学年を超えて影響は持たなかった。また、英語についても1年次の学力が親の期待に影響し、また、1年次の学力の高さが2年次の親の期待を高める関係が見出された。しかし、2年次の親の期待から2年次あるいは3年次への学力の影響はみられず、2年生以降は親の期待は関係ないといえる。

以上を踏まえて、以下の3つの点が生徒への指導に示唆を与える。第1に、3教科に共通して1年次の学力が親の期待に影響を及ぼしていた点である。国語と英語においては、2年次の親の期待にも影響していた。これは、1年次は、中学から高校へ進学し、環境が変わるために、親も子ども自身も学力への期待感が高まる時期であると考えられる。学校環境の変化は、友人関係などで不安定要素が増す時期でもあるが、その一方で、

心機一転という側面もあるだろう。そのために、特に学力が高いほど親の進学への期待が高まり、子ども自身もそれを認知していると推察される。特に国語においては、この時期に親が子どもに期待することは、学力に肯定的な影響をもたらすことが示唆された。本研究では、期待をどう受け止めているかは扱ってはいないが、親の進学期待に対する認知の仕方は、国語の学力の規定要因の一つであるといえよう。

第2に、高校での学習効果である。本研究では数学と英語に関しては、親の期待の影響は見られなかった。数学と英語の学力は、3年間を通じて大きく伸びている科目である。したがって、2年、3年次の英語と数学の学力には高校での学習効果の影響が強く、親の期待の影響は相対的に減少したと考えられる。

第3に、教科の違いである。国語は親の期待が学年を超えて子どもの学力に関連するが、数学や英語ではそのような親の期待の影響はみられなかった。これは、国語に比べ、数学と英語は学年間での相関が相対的に高く、1年生から3年生までの全体の学力の伸びとは別に、個人の成績自体は安定しているということである。この点で、数学と英語は、親の期待とおりの成績がとりにくい科目ともいえるだろう。

最後に本研究の課題について述べる。本研究は、親の期待と学力との関連を教科別に検討し、国語において親の期待の肯定的な影響を見出すことができた。しかし、親の期待をどう受け止めるかについては扱っていない。渡辺・新井・濱口(2012)は、中学生について調査を行い、親の期待を子どもがそれをどう受け止めるかが子どもの適応にとって重要であることを示している。子どもによっては、親の期待を負担と受けとめる者もあり、かならずしも親の期待認知が学力にプラスに働かないケースも考えられる。おそらく、親子関係や、子ども自身の自己認知も関連することが考えられる。今後は、この点を詳細に調べ、子どもが親の期待をどう受け止めるかについて検討することが課題である。

さらに、本研究は、進学希望者がほとんどを占める私立の女子高校を対象とした結果であり、一般化することはできない。今後、より多くの高校生を対象としてより適合度の高い関連モデルの検討が必要とされる。

## 謝辞

本研究にご協力いただきました高校の諸先生方、ならびに生徒の皆様へ心よりお礼申し上げます。なお、本研究はJSPS 科研費・基盤研究(c)の助成を受けて行われました。

## 引用文献

- Benner, A.D. & Mistry, R.S. (2007). Congruence of mother and teacher educational expectations and low-income youth's academic competence. *Journal of Educational Psychology*, 99, 140-153.
- Englund, M.M., Luckner, A.E., Whaley, G.J.L., & Egeland, B. (2004).

Children's achievement in early elementary school: Longitudinal effects of parental involvement, expectations, and quality of assistance. *Journal of Educational Psychology*, 96, 723-730.

- 春日秀朗・宇都宮 博・サトウタツヤ (2014). 親の期待認知が大学生の自己抑制型行動特性及び生活満足感へ与える影響：期待に対する反応様式に注目して 発達心理学研究, 25, 121-132.
- 河村照美 (2003). 親からの期待と青年の完全主義傾向との関連 九州大学心理学研究, 4, 101-110.
- 庄司知明・藤田尚文 (2000). 子供からみた親の期待について - 親子関係診断尺度 (EICA) との関連から - 高知大学教育学研究報告, 59, 55-68.
- 遠山孝司 (2006). 小・中学生の親子関係、親からの期待、子どもの目標の関係 - 親子関係がよいと子どもは親の期待に応えようとするのか - 名古屋大学教育, 53, 37-55.
- 渡辺雪子・新井邦二郎・濱口佳和 (2012). 中学生における親の受け止め方と適応との関連 教育心理学研究, 60, 15-27.
- Zhang, Y., Haddad, E., Torres, B., & Chen, C. (2011). The Reciprocal relationships among parents' expectations, and adolescents' achievement: A two-wave longitudinal analysis of the NELS data. *Journal of Youth and Adolescence*, 40, 479-489.